

【巻頭言】 新総長選挙と「新中期計画」、その柱としてのキャンパス問題について  
 ----- 佐々木 嬉代三

【退職職員からのひと言】『ユニタス』(学園広報誌)の編集にもっと工夫を！

【追悼文】 追悼 西川富雄名誉教授！ ----- 岩井 忠熊

【編集後記】 1950年代後半、拙速な提案で、“泡と消えた”「緑の学園構想」の再現か？

巻頭言

総長選挙と「新中期計画」、  
 その柱としてのキャンパス問題について

「立命館の民主主義を考える会」 副代表  
 佐々木 嬉代三

はじめに

前回のニュース第 27 号でお知らせしましたように、「臥薪嘗胆」と「捲土重来」の 3 年間を経て新しい総長選挙規程が設けられ、現在その下で選挙管理委員、推薦委員、選挙人の選出が順次進み、この後 10 月 6 日の推薦委員会からの総長候補者の推薦とその後の一般推薦を俟って、10 月 31 日に選挙人による投票が行われることになっています。民主的な枠組みを得て漸く、学園再生への制度的歩みが着実に始まりつつあるように思われます。

新中期計画「中間まとめ」の提起

けれども、先のニュースの「編集後記」で示唆しましたように、総長選挙の動向を睨みながら、立命の将来構想を予め決定しておこうとする動きも強まってまいりました。退職者の皆様には十分お伝え出来ていませんが、昨年末に新中期計画策定に向けて 5 つの委員会と特別委員会が立ち上がり、今年 6 月 2 日の常任理事会の討議を経て「中間まとめ」が教授会をはじめとする各教学機関に降ろされました。新中期計画は R2020 と称されるように、今後 10 年に及ぶ「長期」計画と目されているのですが、7 月 7 日に各機関の討議を集約し、9 月末に「答申」を提起する方向で進められています。計画の重さに比して拙速にすぎる進め方になっており、各教学機関の意見は聞き置くだけで、予め立ておいた結論を押し付けるのではないかという

警戒感を、多くの教授会を抱いたようです。

もっとも、「中間まとめ」の冒頭部分に記された総長の見解によれば、新中期計画の核心は「質の向上」であり、そのためにはまず「教育・研究の質向上」を図り、「教職員の力量発揮をささえる条件の設定」を行い、さらに学びの空間の拡充や研究スペースの改善等を含む「キャンパス創造」を行うというのですから、まあ、いいことづくめの案のようにも見えます。ですから、中間まとめに対する批判も、それが学園の現状分析を欠いた一般的・抽象的な問題提起にとどまり、財政的裏付けを欠いた「単なる願望」「空虚なアイディア」(経済学部教授会の意見)の提示にすぎないのではないかと、という点に置かれていたように思われます。

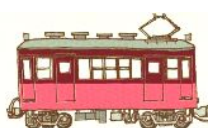
けれども、実のところ総長は、「キャンパス創造」に関わって、「新たなキャンパスの展開も視野にいたれた検討が課題」になると提起しておりました。この「新たなキャンパスの展開」に類する表現は、第 1 委員会から第 5 委員会に及ぶ「中間まとめ」の中では一切出てきません。中期計画のフレームを議論した第 1 委員会は、「新しい教学領域創造の可能性」について言及していますが、その場合にも「規模問題と教育研究条件の推進を所与の一体とせず、『質的充実・向上』を目的として条件整備を行うことにより学園創造を進めることを意図している」と断っています。その意味では、「新たなキャンパスの展開」



という提起は、「中間まとめ」の枠を飛び越えた総長の独断的な発言だという誇りを免れません。だが、たとえ誇りを受けようとも、ここにさりげなく挿し込まれた一つのフレーズが、次の唐突なる新キャンパス問題を導くための、巧みな布石であったのです。

### 唐突なる「新キャンパス問題」の浮上

7月21日、「立命館大学キャンパスに関する将来構想」と題する新中期計画特別委員会報告が常任理事会で行われ、続いて7月23日、臨時常任理事会を開いて継続討議され、結局この報告が学部教授会や部次長会議等の討議に付されることとなりました。教員にとっては長い夏季休暇を挟んでのこと、討議集約は9月末とされ、10月には新キャンパスの判断を下すとされているのですから、ここでは拙速というより、殆どトップダウンに近い運営方式の復権が志向されています。しかも、いち早く経営学部と政策科学部が移転へ名乗りを挙げたというのですから、少なくともこの両学部には他学部に先がけて予めの根回しが行われていたとみるのが常識でしょう。場所は大阪北摂地域、JRの駅至近、JRの大阪駅、京都駅、二条駅より12～40分、面積12万㎡（衣笠キャンパスとほぼ同じ広さ）と記載されていますから、衣笠、BKCに並ぶ第3のキャンパスを茨木市付近で開設することが目指されているということなのでしょう。



一体全体、なぜ今唐突にキャンパス問題が提起されるのか、それが最初に浮かぶ疑問です。たとえ新キャンパスを志向することがあるにしても、しかし今、新しい総長が生み出されようとしている矢先に、なぜ立命の将来を枠付けする決定を急ぐのか、全く理解に苦しみます。新しい総長を選出し新たな運営体制を確立した上で、じっくり腰を据えて学園の将来像を検討するというのなら至極当然のことなのですが、新しい総長実現の前に学園の将来像の決定しておくことが、現執行部によって慌しくも企てられている。なぜか。考えられるのは2つのこと、1つは新キャンパス展開を最大の争点にして総長選

挙を勝ち抜こうとする戦略があること、2つには誰が総長になるにせよ、新キャンパス展開を既成事実化し、それを推進する勢力を学園の中核に残すこと、であります。川口総長を始めとする現執行部は、新キャンパス展開という大きな網を教職員に投げかけ、その網の中での計画実現が学園の取るべき唯一の道だと描き出すことによって反論や異論を封じ、自らの権力掌握を確かなものにしようとしているのです。ずる賢いやり方だといわざるを得ませんが、それは同時に、立命館の将来を担保にした危ない賭けに乗り出すほどに、彼らの危機意識が強いことの現われだとも思われます。

### 特別報告の内容

さて、特別委員会報告は、まるで川口総長の意をうけたかのように、「今後、本学が整備していかなければならない点は、『人的体制の強化』と『キャンパス創造』の2点であること」が、「概ね共通理解になっている」と述べて、本報告を始めています。「中間まとめ」に対する意見集約段階で「共通理解」なるものが形成されたとするのは、予定の結論を押し付けるために取られる騙しのテクニックですから、これに引っかかってはなりません。また、「キャンパス創造」は、その意味の取りようによっては様々な可能性を含みますが、「今回、キャンパス創造として新キャンパス展開を提示」と述べて意味の限定をはかり、新キャンパス展開を「新キャンパスによって生み出されるスペースを活用して教育研究を向上させていくという、質的向上を目指す基盤」だと位置付けて、「中間まとめ」との整合性を図っています。いわば「中間まとめ」と抱き合わせの形で、新キャンパス展開は「質的向上を目指す基盤」なのだから、これ抜きに教学の質的向上は図れず、学生のキャンパスライフの豊かさも保障し得ず、従って立命の未来の可能性を語る者は新キャンパス展開に反対しえないはずだ、という論理構成になっています。巧みな言い廻しですが、しかしこれにも騙されてはなりません。新キャンパス展開は様々な条件が満たされた場合に取り得る一つの

選択肢に過ぎず、万能薬でもなければ特効薬でもありません。確かに衣笠は日常普段に混雑し、BKC も相次ぐ新学部増設によって手狭になりつつありますが、たとえそうであっても、教職員と学生の距離を近づける努力を怠らず、学生に語りかけ学生の声に耳傾ければ、教学的な営みを今まで以上に深いものにすることは十分可能なはずなのです。教育は人と人との営みであり、必要なスペースとは心が通じ合うスペースです。これを忘れて空間的なスペースの拡大ばかりを問題にするのは、教育的というよりもむしろ、外観にとらわれた皮相な見解だと思われまます。もてはやされる先端的な研究が、地味ではあるが必要不可欠な基礎的研究の軽視を招くように、鳴り物入りの新キャンパス展開は、既存キャンパスの日常的な教学努力を軽んずるおそれがあります。質的向上を叫ぶのなら、まづもって現状の何をいかに改めるべきかを具体的に指摘する必要があります。膨大な財政負担を伴うキャンパス新展開は、様々な検討を積み重ねた上で検討の柱に据えるべきかどうか、苦しい判断を下すべき種類のテーマなのです。

### 十全なる討議保障の必要性

もっとも、空間的なスペース拡大が、内発的に必要になることもあり得ます。立命の経験でいえば、BKC への理工学部移転が典型的にそうでした。このような場合には全学合意もとり易く、移転は全学の祝福のもとで行われます。だが、内発的な逼迫感がなお不足する場合には、オープンで原則的な全学討議を繰り返し行い、移転に関する合意が広がるように努めなければなりません。そのためにも討議する時期をきちんと選び、討議する時間を十分に保障する必要があります。移転賛成派と反対派が別れ、相互に足を引っ張り合うなどは愚の骨頂です。相

互に納得できるまで時間をかけ、移転に伴う利点にばかり目を奪われるのではなく、新たに発生するであろう教育・研究上の問題や正課・課外活動上の問題、事務体制上の問題等々を見通して、それへの対応策を予め検討しておかなければなりません。とりわけ今回の提起のように、規模拡大を伴わず、移転によって生ずるスペースの有効活用が教学の質向上の原資と考えられている場合には、土地購入や校舎建設や設備購入などによる多額の初期投資がそのまま学園財政上の負担の増大として押し掛かりますし、拠点キャンパスの増加による経常経費の増大も見越さなければなりませんから、慎重で厳密な財政上の検討が不可欠です。こうした検討結果を全学にオープンにし、全学の合意を得てはじめて、キャンパスは別れても学園の一体感は保たれる、という状況が出来上がるのです。こうした議論展開を導くよう、理事会は心すべきであったし、これからも心すべきです。拙速やトップダウンの方針決定は、許されるものではありません。せめては、新総長を頂いた新体制のもとで再度真剣な検討を重ねることが、「制度としての民主主義」を成熟させるためにも、必要不可欠だと思われまます。



以上私見を交えながら、現在学園で生じつつある深刻な亀裂、その導火線が理事会側の唐突なる新キャンパス展開の提起であることを述べてきました。退職教職員の皆さん、どうぞ心して、この議論の行く末を注視してください。そして、立命館の民主主義の再生がごまかしに満ちた泥だらけの道に迷い込まないように、皆さんの知恵を寄せてください。皆さんの過去の立命館体験が、現在の混迷を打ち破る糸口になるやもしれません。



## 【退職職員からのひと言】

### 『ユニタス』(学園広報誌)の編集にもっと工夫を!

ある退職職員から、「考える会」事務局に対し、「ユニタス」(学園広報誌)に寄せられた感想を紹介します。

希望した元教職員に送られている、「ユニタス」(学園広報誌)に対し、「無料で送って戴いているのに、こんなことを言ってもいいかな」と躊躇して述べられました。

「退職者の少なからずの人は、昔に比べ読みやすくなっていると評価しているが、重みがないというか、大学というアカデミックさが感じられず、どこかの会社のフロントに置いている広報誌と変わらない”軽い感じがする”。学内で本当に「教・職協同」のコミュニケーションが取られて、教育・研究の営みがされ、大学の視点から社会に発信(啓蒙・啓発)できているのか心配です。校友会が発行している「りつめい」誌の方がまだ“社会に発信”している感じがします」、と。

これに対し、大学にいる者として、昔に比べて学内広報関係はインターネットのホームページにも力を入れ、APU、各部課、附属校ともに多種多彩に発行されています。ユニタスも教職員だけにしか配布されないユニタス・レビューもあります、と説明しました。

しかし、ご本人は『ユニタス』(学園広報誌)は学内と退職者をつなぐ唯一の広報媒体なのだ(他大学とも交換する?)から、衣笠・BKC・朱雀それぞれのキャンパスの建物の中で“仕事しています”というようなニュースでなく、年金生活の退職者は全ての全国紙、地元紙を購読していないので、大学が社会に常に何かを発信していることが実感できるように、編集にも工夫して欲しい)、とダメ押しをされました。

学園のそれぞれ部課は、みなこれで良しと思って業務に邁進されていますが、時には、世間の人々がどのように学園を見ているのか、ネットワークを生かして見つめなおして、頑張っ欲しいと思います。

ある居酒屋の壁に貼ってあった標語、お客さん向けか従業員向けかは、読み人次第か?  
“気を使うな、気持ちを使え” “この世はすべてやる気が一番、年中夢中 可能性は無限”

<事務局>

## ドキュメンタリー映画ご案内 ～元シベリア強制抑留体験者31人のインタビュー映像記録～ 昭和二十年初秋 シベリア死の行進は 始まった!

### いったいあれはなんだったのか!

参加費 無料

(カンパ歓迎/参加事前申込み不要)

会場 ひと・まち交流館

(河原町五条下る東側)  
市バス ↓「河原町正面」下車  
京阪電車 ↓「清水五条」下車

・65年前の8月23日スターリンは秘密指令  
(日本人捕虜ソ連移送命令)を発した。

第2日目 8月23日(月曜日)

〈前編〉 午後1時30分  
〈後編〉 午後3時

〈後編〉 午後3時

〈トーク〉 午後2時

栗原俊雄氏(毎日新聞記者)

「シベリア抑留―未完の悲劇」 著者

第1日目 8月22日(日曜日)

〈前編〉 午後12時30分

戦後六十五年 慰霊上映会

「帰還証言ラゲリから帰った

オールドボーイ

2009年/160分 ©いしとびたま  
(問合せ: TEL09054603110)

【追悼文】

追悼 西川富雄名誉教授！

「考える会」顧問  
名誉教授：岩井 忠熊

7月7日に西川富雄名誉教授が逝った。文学部が後の恒心館の場所に新築された木造2階建て校舎以来、私はほとんど60年にわたる交際だった。故船山信一教授とともに朴訥な性格で知られ、シェリング哲学一筋の生涯だったといえよう。私は青年時代カント哲学にいかれたことがあり、談話の折にドイツ観念論について幼稚な疑問をもらすと、やがて手紙で丁寧に私の蒙を啓いてくれたということもあった。律儀な人である。

何十年か昔に彼が京阪・墨染駅近くの府営住宅に住み、私は線路をへだてた市営住宅にいたという時期には、時にお互いの往来があり、やがて西川氏の令嬢と愚息が同じ幼稚園に通うという偶然もあった。いま思い返すとあのころは牧歌的な付き合いであった。

「大学紛争」下に西川氏は学部長代行として孤軍奮闘した。私は日本史学専攻の複雑な事情に巻き込まれて一時辞表を出し、西川氏にもたいへん迷惑をかけた。辞表を撤回して専攻再建の難題にあたった時には、同氏の力強い支援に助けられた。後に私は二部協議会委員長の任期を終えてホッとした時に、西川氏はまわってきた文学部長の順番をどうしても引き受けなかった。紛争時の学部長代行は学部長の任期数年に値したというのが口実である。

いろいろ事情があって結局私が二部協委員長から文学部長に引き続いて横すべりし、「人使いの荒い」細野総長からまで「文学部は惨酷なことをするねえ」と慰められた。

晩年の西川氏は私が「立命館の民主主義を考える会」の発足時に述べた見解に賛成ときいた。私は難聴で西川氏のその発言を聞き逃し、一度ゆっくりと最近の立命について話し合いたいと思いつながら、その機会を得ないまま今日にいたってしまった。残念である。

西川さん！長年の友情に感謝します！安らかに眠って下さい。(2010.7.29)

猛暑の候、お見舞い申し上げます。  
お体を大切に、夏をのりきりしましょう！

いよいよ夏本番。これまで梅雨空の日々が続いて、体調を崩したり気うつになったりした人も多いことだろう。春先からの疲れがたまってくる時期でもある。そんなときに、会社や職場で嫌なことやつらいことがあれば、眠りが浅くなったり、イライラしやすくなったりしがちだ。自力で抜けることもできず、いつの間にか「心の病」に陥ってしまう恐れもある。

心の病は身体の疲れから

朗働のススメ 16

「心の病は身体の疲れから」  
「心のセルフケア」に努めてほしい。  
職場の横のつながりも不可欠だ。2006年に日本生産性本部が行った調査では、心の病の増加には、職場での「コミュニケーションの減少」や「助け合いの減少」が深く関係している。組織がくたびれると、風通しも悪い。身体も心も職場も一緒に、「健康」を考えようではないか。  
(北浦正行、日本生産性本部参事)

## 【編集後記】

### 1950年代後半、拙速な提案で “泡と消えた”「緑の学園構想」の再現か？



現在、全学討議に付された「新キャンパス」問題は、かつての「緑の学園構想」の再現を思わせるものがあります。もちろん、「緑の学園構想」とは1955年当時の構想ですから、現在のものとは背景が全く異なります。だが、広小路キャンパスの狭小性を理由に新校地の獲得に乗り出し、新校地獲得によって文学部の建物建設、商学部設置など山積する問題の解決を志向する点で内容的に類似していますし、何よりも経営主体中心の発想で、唐突に提起されたという点で似ています。教職員と学生あげての大論争の結果、教学コンセプトなき計画の杜撰さを露呈して、この構想はご破算になりましたが、貧困な教学施設や水増し学生の多さといった問題は、手付かずのまま残ることになりました。現実の教学実態を踏まえた具体的な改革案が、なによりも必要であったのです。

その後の学園運営の歴史は、「緑の学園」論争を教訓に教学優先を貫くべく、学部長理事制を中心とする運営体制を敷き、なによりも学内合意の形成を重視してきました。60年代の経営学部および産業社会学部の設置、70年代の衣笠一拠点化、80年代の国際関係学部の設置、立命館中学・高校の深草移転、90年代前半のBKC開設、理工学部の拡充移転等、長期にわたる全学討議を経て合意形成し、全学的な熱意と努力の末に勝ち取られた事業でありました。

しかし、90年代末から2000年にかけてのAPU開設あたりから、トップダウン方式が徐々に強まって来ました。2005年守山の平女キャンパスの買収や融資と一時金カット、その後の「理事長・総長の退任慰労金」問題に象徴される学園トップの「専断」と「横暴」が問題になったのは、ついこの間のことです。しかも、総長や理事長は謝罪することなき言葉だけの反省の弁を述べてはりましたが、最近明らかになったように足羽元慶祥校長夫人に毎月給与を支払ったり、ゼネコン4社から派遣社員を受け入れたり等々、不明朗な管理運営の問題が噴き出しています。教訓を、“忘却の彼方に”追いやるのが、早過ぎるのではないのでしょうか。

前号の「編集後記」で指摘した、耳障りのよい「信頼回復」と「参加・参画」の言葉とは裏腹に、「川本前理事長を越える野心的策動」が、まずは立命館(深草)中高の長岡京市へ移転計画として、続いて茨木の「新キャンパス」設置構想として、急浮上しています。長岡京市への中高移転は、深草の長期にわたる願望であっただけに理解できるのですが、移転を契機に志向された「4・4・4」制(小学校5,6年生との一体性の希求)の実現可能性には、施設条件上からすでに疑問符が付けられていると聞きます。

また最近手にした鈴木某氏の「怪文書」によれば、彼が総長・理事長室部長時代の3月末以前に、既に長田理事長等で茨木の土地購入問題が話し合われていたというから、かなり長期の潜伏期間を経て、今この段階で急遽打ち出したということらしい。

こうした策動は、教職員・学生・院生の要求を逆手にとって、ひいてはこの間の法人トップへの社会からの批判を「新キャンパス」問題に向け、現執行部の地位の継続と安泰を狙った一石何鳥かの意図を秘めたものなのでしょう。せつかく新総長選挙制度をきっかけにして、教学的再生を図ろうとしてきた矢先に、情けなくも嘆かわしい事態です。このような運営を続ける学園トップに学園の将来を託して良いのでしょうか？

以上

\*参考文献：「立命館百年史 通史二」(300頁～320頁)、「立命館百年史紀要」第3号

(M&H)

事務局連絡先：〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1 立命館大学教職員組合 気付  
「立命館の民主主義を考える会(元教職員)」

TEL:075-465-8200(宮澤気付) FAX:075-465-8201

メールアドレス [rits.democracy@gmail.com](mailto:rits.democracy@gmail.com)

バックナンバー掲載：ホームページアドレス <http://rits-democracy.blogspot.com/>